誹諧百回雀乃跡 全

特別
へ5
1905

門へ 5
1905

松寿軒井原西鶴省像

人間五十年乃内を
惜しむ人我も八十の
半をすぎまする

うき世
法月
見るにしも
ふけぬる
未二年
元禄六年八月十日

勝宜富写

瀧澤文庫

序

松寿千歳ハ元来朽ちといへとも西鶴百年の
今し雅名を存し〻名唯あらねく天下乃
人ハ残ル事ハ翁い時の風流ハ
世ゝ知る所なく更ふしふ尽くもいらねせ
大向ハ旅そハいつまゝ年ハ元付めく一日
千六百句を獨詠し〻又延寶庚申乃夏
生玉堂前ハ幕うち開き四千句を独吟せ
當日の趣後大矢数集元ニ子ゝ序ハ見えう

一

同し法三千風才磨一晶其外名ゝる流士等
終日数千句二万句ハ追〻独吟せしとう
さまと大矢数流諧と称する溢觴ハ什ハ翁
世ハう又貞享改元乃冬摂　住吉神ハ和ハ
於く夏日一晝夜ハ二万三千五百句を独唱
して志ゝも悉く楷上ハ弦をはいまゝ
こゝハう二万翁と呼ゝ巻頭乃発句

神誠をもハく息の根をめよ大矢数

東武乃其角し登ハ而ハ延ハ住ハう

二

蠅たらひ乃吟あるとき乃日孔席式出堂法
風客北茶團水の著を進善集を要し
かくて霍翁の英名一拳千里乃いきおい
有しこの風ふ遊し様を隨い此ふ遊ふ
もの丈負を知次とさて又餘力ある時
著述乃和書八十餘部三ふ資生の一助
祝家ハ階梯を祖是當流第二祖也
今ゝ歳寛政壬子仲秋十日正當百年回ふ
序ゝ筆て志願の事有初祖梅翁ゝ

我師蒼狐ゝ六代乃発句將古左簾を
加え各石ゝ彫ゝ日暮里の岡補陀山
養福精舍乃境内ふ造立し祝誌林
先哲の調を永世不朽ゝ殘さむ事を
同列乃三子とゝもふおもへハ社中ハ諸君
諸風士又ハ荷膽の誼ふしかまあ一年も
告まいらを侍ふ愍助芳志を寄せらき
日ゝ侯事成ゝ書ハ行言先生侯筆を
倩ひ刻ハ中慶雲ふ刀を命し玄乃侯ふ

嘗て侍る作に雪節の徳化芳しく
文雅乃冥加殊に其人に且知られ判者たる
月の佳吟を集て一集と号し百田屋乃跡と
題して恩日法莚の几上に供し言葉の道ハ
秋乃夜に光を長く四方より伝ちん事を
祈るいとこの文字ハ爽秋日乃新久しく
古ふ止まるを奏て二陽井谷素外

拝首百拝書

照せ石ふる百年の梅乃月も新

百田鶴乃跡

二祖
二乃翁

鯛ハ花を見ぬ里も有りぬ月
ゆゑ[illegible]百年ふる月鳥　素外
律の風人乃心や志まらん　寶馬
射さこの時的も蕾の定　津富
なら人姿を種ゑ品莨乃不　左簾
ものを異さを富佐嘗こ　宝馬

帆ウ付らを買て山路ふ舩の用　素外
ふと白そそよ日和のつ海る　左簾
ちりちと小さ八粉ふ移る玉露猶　津富
十月十指い茅屋ら見世先　素外
人を待ふ相ぶ灯乃ふ　宝馬
月ふ蔵の暑なるとる　津富
日よ乾く露ぬ光の月草も　左簾
英ふ閑乃宇治屋の秋　宝馬

童部ふ無物ふ雖ふ　素外
手のらふ人を夜ぬ　左簾
晩稲ふ恨乃雪渦ふ　津富
蜂ぬ巣ぬ明し鞍の明神　素外
壁ナ塗や大工乃業も昔今　左簾
かそらぬもの手ふ結納ぬ式　津富
四宮ふ雪乃病ぬ　宝馬
ふ大ふ寄ふ御帰やむ　左簾

補陀落や小坨も帝石ハ浪の中　素外
治まる世乃善も目立次　宝馬
危ふう所試度を屋の猶ふう　津富
酔人いねて月ハ晴と星　素外
古雅殊号参を何と岩倉や　左簾
雲　春と毛とを多ふ人ぬ　津富
白虹ハ立ても地下の氣ゝ身に　寶馬
文車申ぬし所ゝ家の内　左簾

ウ
勧進や名のりて通る杜鵑　津富
天ハいと忠臣乃虚　宝馬
照降を去ぬ占の采相場　左簾
今掃中へ状を投ぬむ　素外
咲ホけと人日ふ法法の会　宝馬
発　於皆俱成就乃春　津富

題月

名月や色をよせける木賊刈　鬼明
馬牽くうてらハ今宵月の湖　魚冠
更くるやハ仙藥婦らん月乃空　安彦
秋吐哀や月とらふもの一ゆを小ぢ　東李
月ちらぬ玉の寄きや雲ハ舞　鳥友
大佛を寄ふ宵乃月見るや　李谷
月を宵さてハ文一ゑ樹の果　楚明
月ハ真如乃玉子と梅花翁の句より
笠ちらふ寄き世界や露弦り　沾項

西窪の遠面ふ宗周ちり代くの発句乃碑造立あるを

名月や梅乃手ちら思ハ上ぢ　十字
名りすや月ふ瑠璃乃ちつ玉　春裡
名りすや古き海ハくを出くし　素月
昔くちくを今宵月をくの岩量よ　如椿
名月や一夜ハ舟ふまをちくこ山　李嬰
玉造の舞楽ふて
名月や押ハ一串ぢ生弱山　仲蛙
名りすの乃ふて来ちるやハくの四方　始暦
月ふくちひ深て漂ふものや人　真鯨

名月や爽かに屋根乃猫　月村

懐舊

風流乃昔さしし月の秋　素纓

ものまねてもくく月ぬ光をぬ　井我

従是ぬ月ぬよりもやや西ぬ空　和水

霞と西空もやや霧ぬ百年忌　春蟻

懐旧　偶作

月乃露ものむやや百年忌　紫鳳

生きうなる往昔細工や松乃月　沾山

百雀のむらくく絵巻の月乃友　雪齋

名月や海ぬ果ぬいかゝこの月　冬英

生きくくと月ぬおもゝや古人の意　五陵

思ふ少しよ私意を月ぬ名月　古牛呑

（けぬ夏病中ぬけぬを猶らるよて今没後なるとぬいへとも加之）

蜘乃間ぬ月ぬうつゝ庭の松　平砂

暮一き人乃跡ぬ月夜ぬ　鶏口

題月　追善　懐旧　立碑　偶作

古くゝ祖翁の寺に宿る志を　発起　一陽井社中

思ひきや清月や昔乃まゝの流き　栗堂
百年を千年ゝ根組松陰月　雅郊
古くゝ入る月や世界ゝ同乃器　一鼎
月も露置て夜更ハ手ゝ絶　素芽
入月をまくゝひ出て島の松　素竹
我新の友ならぬ清き月乃前　吐鳳
いはくゝひや今宵秋をなぐむ空　素人

月あひのまゝ笠よかゝ[illegible]を呼　子蓬
ゝ月半年ゝ所のまゝ磨きてや　素山
蓑よ月清河ゝも月ゝ名ゝ所と　過橋
配ゝ月ゝ名所くゝかゝら新　雀笑
森らまぬ月も亦ゝ庵ゝ友　烏色
新月や月ゝ天窓ゝ[illegible]　麥圃
百年乃むゝ[illegible]ん秋の月　芦英
ゝ清月ゝ清月ゝ清ゝ[illegible]ゝ　久喜軽舟
夜ゝ夜ゝ夜ハまゝ清ゝ[illegible]月　雀舟

月かげや枝葉まばらなる木の林　亀文
おもかげなるは清き月乃恵　冠事
世を経ぬせ経ぬ今宵の月もまた　文洞
月や今も昔の紫水無瀬の松寿水　江永
水や空うらうらと又ながめ月の宵　山鳥
玉川や昔さらせし　妹法月　何来
思ひやり　むかし乃月も向ひ力　素仲
月見ると徳ひ集まるなや星　素緑
名月や豆腐の犬歯かえ次　素云

月ハ出も手向乃数や二万翁　麹人
星のこゑ白ハ魂ひ月も石　素活
雪りや砂土ゝと浅瀬川　金露
芋煮粉ゝ青の下乃八月ゝ　ゝ香
月ハ法百味乃木ひ実まのゝ　女紫蘭
棹さゝや流ゝ月の綾瀬川　李克
待ゝひ月や笑ゝ酒乃数　野幣
嫁やおもし月八年の多百年忘　芦錐
伏くむ見ゝ高秋ひ月　奥中村　素明

六歌仙を会く真如乃月六くし　冬英
月ハ宿家をたゝ会事百年忌　如水
秋毛乃この夜や月ハ夜楚　亀全
かゝるまハ百ゝ清汐月の秋　素翁
的とゝくむるや月ハ向ふ矢数　可笑
秋家中名や廣沢乃池ハ月　素周
月清し野毛ハ蛙の芸乃浪　長虹
久月やまゝ白ゝ小田の鶯　東潮
帆ハら乃ホの宵ハ月や佃島　一雪

十

京久ゝとゝなるこの京月ハ捨小舟　江又
墓掃ふりも琥珀玉乃露　芦雀
月ハ雪ふるゝ百ゝ世ゝ　楚子
清嶽寂ゝ次ゝ隅田の月　三曉
露ちるまハ新ハ百ゝ松乃月　雪風
肱を曲ゝ我毛ものハ富ハ月　百志
月ハ出汐青海原と武蔵野毛　東林
見ゝらゝや秋乃眼ハ月の月　羽州素盌
名月やふ人ゝ浪屋風　公佑

谷月や天水桶を掌露盤　素磨

月見まほしきらめ昔ゑ思ふ　呉龍

月はかつらの思ひ　蘇乃道の叡　素玉

絶頂照る年月新叉吉清水　女遊志

同小見えて暑市のさめる月夜弘　菊且

手向ふ年も十月十日月　貴言

谷月小ゑやのまさ重者叉新　春瓜

年〳〵よ又ひらくなり秋の月　水蛙

人百年月ハ昔ふかきらめや　己曲

流〳〵思ふい出さくや月乃思　李杏

思ふやや月流詠林乃百樹陰　素尺

幾代節を云と月光ゑや経の月　川町

武義平や竹笠若ゑ歌く昔乃月　還童

野路云ゑく伊申さの也ゑ花ゑ　奉畏

屋根毎の雲蔵も申ゑし月ゑ青　可長

月ゑ[illegible]清光元天下一　幡乃

うかまゑて入を惜むや青月夜　醉知

谷を百年通し矢数や月の弓　藤尺素曲

名月や浦士みな焚火乃夜もきこえ　櫻男

予ら句さぢの年浜山の玉葛集、入集せしふ爭老の誤よや
置もきこえとおもよて、ひらためて此集にそそいのせ侍る

月を友ふ僧の灰老を岸の松　桂男

言の葉ハ手〳〵代朽せ灰月乃秋　涼山

野も山も月弱屋ふ山きらい　素琴女

月中乃毛ものよ野中ゆ此家　春律

山畑てて夜を平屋乃海の月　豊後冬嶺

たの寺詠めに行くある雪ゆ乃　賀童女

むら鳥乃村雲ゆ乃夜　呉外

象潟のりゆや西施の夕化粧　徒洲

名月や庭篠竜の孔雀色　素絢

草ふ露乃光ゆ蘇を月夜風　山町

名ゆ乃や肥ゆ乃ゆ見ゆる洞佛　素東

むさ〳〵ゆや閑を流ゆ月乃もの　撰枝

碑の文字を玉代あきやうと月ゆ　星尾女

石ゆ玉露や少ゆ〳〵月乃雁　加津

碑ゆ新乃涼〳〵ゆ森の月　平布

雪を見ふ弟ゆ乃ふ世ゆ　帰鳳桐生

百とせや君せぬ姿袈裟と月　祇井
月雪に新羅の道程も和代　琴麦
牡丹照月乃この庭らや妹の風　花來
月八人のかさよ琴の唱歌よも　千枝尼
世は月に子子よ引書ひ三月新　芝水
月一ろや遠来るこ山も風ひやこ　舟子
満ぬかと月に手砧や宿乃酒　李冠
りも秋も俗世いとこ指向ひ　榊繁
月や武蔵く林の下陰も　素悠

十三

作く也子ひし月の照を今　其莫
名月乃むろや沖の珠　書來
白妙しや住く思ひ月乃歌　素后
月乃ないねもも思ひ新　和交
古ひ井や千石船ま月見宿　士藤
道ひ乃酒醉乃月も月の夜　住虎
新ひ月ひ蓮見一池小月一輪　唯澄
寄乃手向今宵うき世月の夜　橘雫
月の夜八ひ井ゆ山住居　小金井露水

人ならハ世ごとの一句ならむ月を哀
月百年を閲む景色年乃数　蝶水
清しい性を善れる水徒月　蝶露
初祖ハ梅二祖吊ふ秋や松の月　霞外
煉らむ句と百年境ぬ月乃前　素德
かゝるあらぬ月の詠めや十日比　素全
月ふ酒ふ詠むに百年忘　万叶
月を書松をかゝもきゝら陰　惟隆
照月や天下一面雅乃境　巳禮
寛之

新宮ふ浪乃月も除ふなら欣　素潤
なりけりき昔の宮やりしハ　素豊
古き月詠めむ松ハ下むしろ　歌明
百年のおもものけ深しふ乃月　傳賊
百と勢ぬ月ハ名の光を　雀子
月や碑の墨らあハ名ハ天下一　竹舟
石ふもの中ゝ宮ふ月乃泉　亀山
照を谷ふ見里ハ浪ふ月　玉川 素調
世を照し人ハ七十昔十日月　鎌倉 英富

日蔭の石もはし月乃碑の位置　龜長
月ふきかしらみ安や芋壺粉　素英
いろふ照も名やりの秋氏世界　鷹雪
百里乃外古人乃月を宴ふ吊　青羅
雲を地ゑ姿や庭苔ゆ孤月　東水
月の雪降へ事雲も敷き夜ゝら　希言
見て色ふ屋根ゑ撥ゑ於蔭の月　古友
長次月ふ五七文乃云紫三五ゑ夜　呉暁
雲を色てゝ色い新ふし月乃宿　如淵

白露を玉とめつむや見ふの月　路洲
見ゑ色ハ月も笑新や世界を　酒来
秋吉く蛙跡しゝくゝゝ　鷹朝
月宮や吉ハ川しゝや吉島　德富
かの宴ゝ八さく梅ふ二日月　可也
月や宴ふし公明るく湿し人　李暁
谷月や赤ハ撥ゑ月ゑ雪　素溪
公ふ人て見ゑゝや灰中月　伴己
月ふ知ゝや百年前の古ゝ持　行言

題月　同

碑や月乃昔をとゝのへし　補助社中　後五千堂　宝庸
蟀の鬚は光をやりまくらん　宝驪
名月や豆乃種の我もくも　江鳥
師は碁ゝ碑の新譜も月夜かな　蒼嶺
人やむしゝ貫名八言き乃ふ月　鳳尾
浪い寿江の故人やゝ乃江戸のす　宝驥
今年京浪乃はまりそねと　蒼瀧
百年乃昔も月はこゝろを　眠雀

十六

傾ゝ乃月の玄ゝや百年忌　社水
江とゝむ流きや月乃新宮し　卜人
紫乃戸を敲く人あるゝ乃月　柏子
名月や浪きゝろゝの秋乃海は面　其英
いゝへのりやゝ青は叶光ゝ　晨風
照りは新やゝ世界をゝ乃ハもの　雀声
名月や名ゝも古き島乃跡　可雄
朽ゝ名ゝ月の洗ふや石の文字　如帆
明月や庭ゝ松あゝ流ゝ一つ　李朝

名月や流まを伝ひ影とくる　湖遊
其姿を作けハ唐一ふの月　髪々

題月　同

うまくもとけく雲間の月を雪　補助社中　其葉
名りしや雅遊なつこのしき菅落　公鼎
百とせもかそらぬ名や松ハ月　桃寿
月よ移ハ八夫をおもふ　祖富
詩ハ哥やいみへ人を月の姿　松舎

裡やさそふ照らせ文字の月　蓮子
月や貫いみへ人を今も姿　貫時
見ても百とせやうの月ハ　沾座
侍乃百と物ふるより乃雪　何焉
ちを照や浪に花ハ昔月の姿　田機
春のうち西月夜鳥乃こつてり　雨橋
百とせの昔あるとも月ハ夜　津蛙
西山や月社ふるとのふ綿を　芦風
我の自とや玉江乃月も廿十秋　懐鯉

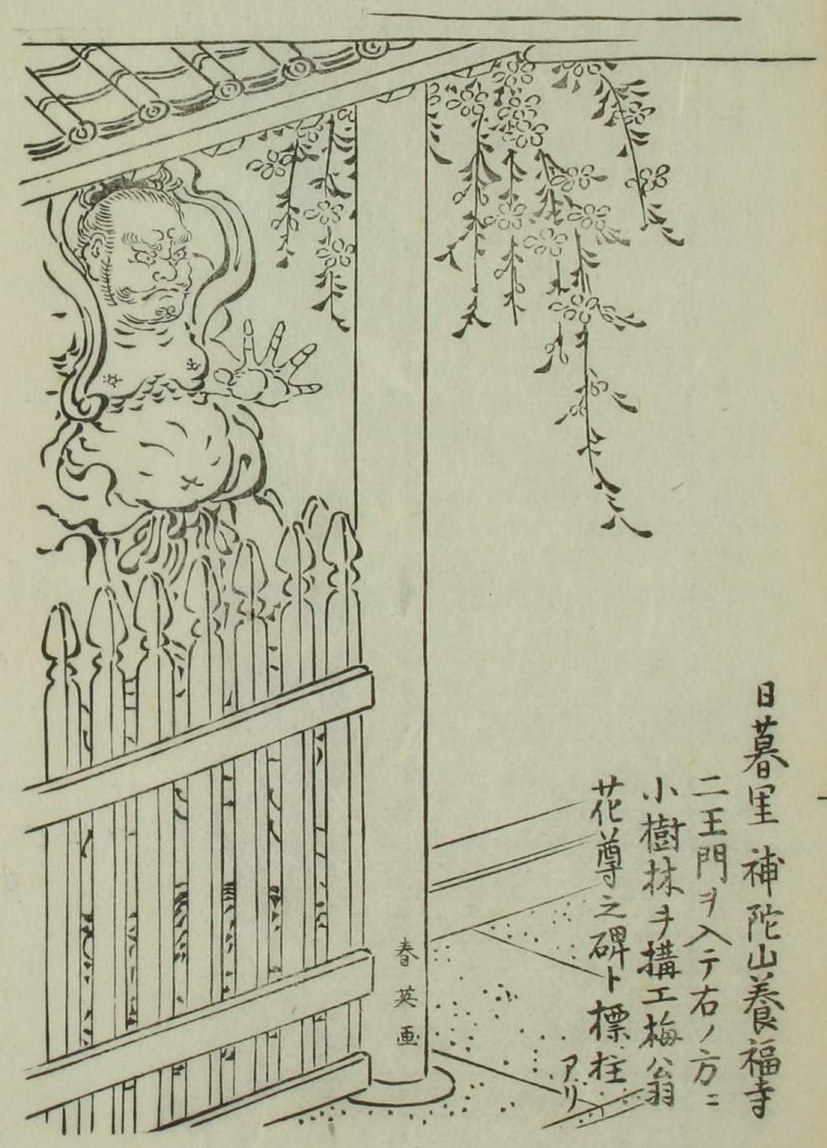
花其生涯月も二萬翁　雇童
古道や百里十里月の比　宜富

題月

補助　雲齋
社中

音羽の滝や樹こもる月今宵　伴侶
名月や幽々見申る雲乃風　長雅
きぬぎぬや年ぬまぬ目新現　二鏡
降露も見申るおもしやり子の月　葵簾
名月や塒をかり申る鳥も有　如雲

照月乃星乃かくれ今宵哉　文綾
名月や四方小湯めぐる人さくら　喜雪
名月や少てもあるの夜の帝礎　梅賀
ちりつの花さき初代やり今宵　燕府
月のこゝ見星も湯る霧さくら　因業
名月や藤さらぬ鳥乃図雨　口十
法人乃宮や古くさいの月ぞ　宇扇
鳥さえ丹小菊ぶ光り　不醉
名月や百日紅もさいのひとあし　環齢



日暮里 神陀山養福寺

二王門ヲ入テ右ノ方ニ
小樹林ヲ構エ梅翁
花尊之碑ト標柱アリ

○大碑 正面

於我何有哉

江戸名物鏡とも也芝ゑ樽

誹談林初祖 梅翁西山宗因

同 左ノ横

我窓乃梅島も時初のまを二ゝ 二祖 松寿軒 西鶴

少々も寿ら松の命を山はゝ 四祖 曲菴 玄哲

何事ぞと夜乃紅葉や鹿の声　六祖　五千堂　蒼狐

同　右ノ横　三祖　狂六堂

時雨うめ黒木よりゐハ何く我　才麿

名月や何仏我の隅小杜宇　五祖　活井　舊室

獨居ゑ別るかまこのんさとる　豊菴門　古堂　左簾

裏ニ七叟ノ号目ヲ記ス梅翁百年香ニ出セハ畧ス

北

○副碑　左ニ添テ建　但菱形ナリ

表二方　發起　玉池　谷素外

補助　誹諧林總社中

裏二方　寛政壬子仲秋立

石工　中慶雲

○小碑　右ノ方前ヘ五尺計去ル但此碑ハ一阪井社中ノ発起ニテ立ル所也

正面　後五千堂

三月小見て置りの海ゑの寶馬

知る事の八月乃ミ我独笑ミ　一陽井素外

夜ふ〻秋也名月小戸を敲く音　姸齋津富

名月やちらめ〻て搖さゝる　幽雲齋左簾

右ノ横ニ宗因流畧傳ヲ記ス是亦百年香ニ出ル所ノ闕之裏ニ

是歳壬子之秋上距井原西鶴翁之没實ニ一百年矣吾一陽井主翁首倡其事ヲ刻ニ

鼻祖洎先哲裒句各一章ヲ干貞石碑ニ而傳ヲ爲ニ旁求ニ諸公名流之什ヲ別ニ錄ニ爲巻ト吾カ翁原始追遠之志勤矣於是我輩据彼巻中ニ取ニ題スル更ニ採擇シ師家四老集中ニ咏ル月ヲ句ヲ對ヲ大碑之側ニ旌ス其由爾　門人某等謹書

追加

置や露月ふ〻ゑ石乃艶　視日桐生

名月や赤ゝ地蔵草も花　玉江

新くまもし未ハ清川の秋乃月　後五千里社中　漁舟

時哉二祖二方翁西鶴乃百年回忌に月次
題して其集を著はせる事やいとかるる
始祖梅月宗因ゝ代々の発句の碑
造立たまふる事や是発起乃丹誠
神助の感効ものく借養の孤蕊を
宮小尽開て道の法燈を燈し生涯の
除光を赫奕ゝらしむる事百年法
今日是の如く今日乃百年といふも実に
是ぞ此くもるべき事を主ふ新ふものならし

廿二

記乃初祖月の二祖又千代の秋　寶馬

月乃明らかなるを向はく雀翁法
遁世の句をおもひ吟ぜしハ百とせ乃
むかしに見る世の人ハ新色形容さも宮小
相對し彼らふ公地ぎせら逢侍る

月や霊ゝとの索月の寺佛　津富

二祖西雀翁祈ふ事てハ仮名草紙

なほとたゞ徳ら[illegible]中ふいかへふ答てる
孟將勇者を味方として國王宮裡て
責入し筆の佛き世人ふ真を保さ[illegible]
方便乃徳よりそ今徒國ふ安樂の
光ならんとおもへ
徒林の月いや照せ小夜ごろも　左簾

西鶴發句集

近而稗行